

# 万国博覧会と異文化交流

—1904年セントルイス万博の事例を中心に—

The World Fairs and Cultural Exchange:  
Focusing on the World Fair in St. Louis

楠 元 町 子 (Kusumoto, Machiko)

The World Fairs which were extensively held in western countries from the middle of the 19th century performed the function that positioned non-Western countries at a certain level of evolution. In the world of fairs, Japan presented two images: one, the Asian traditional nation, and another, a modern nation like the western nations. However, America considered Japan as a traditional nation. On the other hand, Japan, like other western nations, became a colonial power, considering China, Korea and Taiwan as traditional and exotic nations.

## 1. はじめに

19世紀半ばから欧米諸国によって盛んに開催された万国博覧会は、開催国の国力のデモンストラーションの場であり、参加国の国際的地位を内外に示す場でもあった。日本政府は、日本文化、生産の実力及び産業の発達を内外に展示し、欧米人の嗜好に適した物品の陳列により海外貿易の拡張を図ることを目的として、万博に参加していった。

万国博覧会は今日に至まで、「日本」を諸外国に直接紹介する異文化交流の場である。現代にもよく知られた「ゲイシャ・フジヤマ」という日本観が形成されたのも、万博での日本文化の紹介に負うところが大きい。日本は万博参加当初より、欧米人のエキゾティズムに訴えながら日本文化を展示し、ヨーロッパ工芸品にジャポニズムが流行するきっかけを喚起した。ジャポニズム流行の最中に開催されたセントルイス万博で、日露戦争の勝利を背景に欧米諸国と同様な近代国家というイメージを日本政府は創出し始めた。

日本政府はセントルイス万博では、金閣寺を模したパビリオンの建設や、娯楽街「pike」での日本村の開設などにより西洋と異なる日本文化を提示すると同時に、「西欧列強」と同等な帝国主義国家としての日本を強調するための台湾館の建設、海運館での日本の植民地を示す巨大地図の作成、「アイヌ人」の展示などを行った。このような「日本」の展示は、西欧諸国中心の万博のなかで、どのように米国に受容されたのであろうか。

セントルイス万博の展示の中でも特に注目されたのが、先行する万博を大きく上回る規模で行われた「人間の展示」であった。この悪名高い「人間の展示」については、よく知られている<sup>1)</sup>が、万博会場内の三か所、「フィリピン村」、「Pike」、「人類学部門」に展示された「人間

を観覧した東洋人がどのような感情を持ったのかは、あまり研究されていない。

万博に関する主なる研究としては、博覧会を国際政治と結び付けて論じた吉見<sup>2)</sup>の著書や、万博を世界に対する日本のイメージの創出の場として捉えた園田<sup>3)</sup>、佐野<sup>4)</sup>の研究、米国開催の万博での日本の評価変遷について論じた Neil Harris<sup>5)</sup>の論文、セントルイス万博を対象に日本のイメージ形成をナショナリズムの面から研究した畑<sup>6)</sup>の論稿がある。これらでは、日本政府の日本イメージの演出方法とその意図の分析はよくなされているが、米国での資料に基づいた受容の分析は不十分であると思われる。

本稿は、日本国政府のセントルイス万博の史料、日本の新聞記事、セントルイス公立図書館所蔵史料等の分析を通じて、万博における日本イメージの創出の実態とその米国での受容のされ方を検討したい。

## 2. セントルイス万国博覧会日本政府参加の経緯

世界最初の万博は、1851（嘉永4）年ロンドンで行われた。日本が初めて万博に参加したのは、1867（慶応3）年のパリ万博で、江戸幕府は和紙、日本刀、磁器、絹織物などの工芸品を展示し、清水卯三郎の経営による柳橋芸者3人が接待する日本風の茶店が大変な人気となった。明治政府が公式参加したのは、1873（明治6）年に開かれたウィーン万博であり、日本は白木の鳥居、奥に神殿、神楽堂や反り橋のある日本庭園を作り、日本ブームを起こした。1893（明治26）年のシカゴ万博から各国が政府館を建設することになり、日本は平等院鳳凰堂を模した政府館を建てた。以後、日本は2000（平成12）年のハノーバー博で和紙を使用した政府館を建築したように、一貫して日本独特の庭園、伝統的建築様式、日本趣味の強いデザインの政府館を展示してきた。

セントルイス万博<sup>7)</sup>は、ルイジアナ購買百周年を記念して、ミズリー州セントルイスの西端フオレスト公園を中心に1904（明治37）年4月30日から12月1日にかけて、開催された。セントルイス万博は、20世紀に入って最初の大規模な万国博覧会となり、総面積514平方キロメートルの会場内に1576の建物がつくられ、会場内を走る鉄道は21キロメートルに及び、17の駅を建設、シカゴ・セントルイス間の無線電信の実験、飛行船や自動車（160台）が出展され、入場者は約2000万人に達した。

日本政府への参加要請は1901年8月に米国駐在高平公使を通して行われ、さらに10月に日本駐在米国特命全権公使より、日本の外務大臣に日本が博覧会に参同出品し、代表者を派遣するように要請してきた。当初この博覧会は1903（明治36）年に開催が予定されていたため、出品準備の時間がないことと、同年大阪で第5回内国勲業博覧会を開催するので同時に外国博覧会に参加することは困難であった。日本は政府としては参加しないで、民間の商工業者勧誘して出品団体を組織させ、補助金を支給して出品することにした。しかし諸外国の参同準備がととのわなため、合衆国は開催を1904（明治37）年に延期し、再度政府として博覧会に参同することを日本政府に要請した。日本政府は手島精一の強い勧めもあり<sup>8)</sup>、1902（明治35）年10月

に閣議を経て公式参加を決定した。同11月博覧会参同準備委員会を結成し、委員長に農商務総務長官の安藤件一郎を任命し、同委員には農商務省高等官を任命した。1903（明治36）年7月10日には臨時博覧会事務局を設置し、総裁ははじめ平田東助、次いで清浦奎吾、副総裁は松平正道、事務局長は手島精一であった。

セントルイス万博は、1900年のパリ万博より出品点数も多く、物価も高騰し、セントルイスは欧州諸国より不便であるから、費用も多くかかると予想された。しかし日本はロシアとの戦争を想定し、節約を旨とし費用が少なくても効果が大きくなるように計画し、参加費用は前回のパリ万博の約130万円よりはるかに少ない総額80万円として、1903年5月、第18回帝国議会で協賛を得た。

19世紀から20世紀初頭に開催された万博では、各国の展示面積とその位置が、世界におけるその国の地位を示す図であったため、日本政府は万博参加を決定すると直ちに準備委員を派遣して現場の視察調査をし、展示面積の拡大や区域の変更を要求している。早くも1903（明治36）年1月20日の米国の新聞<sup>9)</sup>に「日本が丘を要求、名古屋城と日本の喫茶店を再現するために天皇の代理人はドイツの敷地に匹敵する土地を希望している」、3月4日には「日本政府が展示物をふやすためにさらに18000平方フィートの土地が欲しいと訴えている」<sup>10)</sup>という記事が見出される。政府館敷地として当初指定されていた場所は、平坦地でその二面が高地に接しているため日本建築の敷地としては不適当なため、博覧会会社との数次の交渉の結果、美術館の西方で機械館の南隣にある丘上に敷地を得ることができた。最終的に日本は各展示館の陳列スペースと日本政府館の敷地と併せて27万平方フィートの面積を獲得した。この面積は、シカゴ万博（1893年）の2倍、パリ万博（1900年）の3倍にあたる。展示スペースの拡大と西洋諸国に匹敵する好条件の政府館建設地の獲得に成功した原因は、ヨーロッパ諸国が米国開催の万博参加にあまり熱心でなかったことや、ロシアの万博参加中止による影響かと見られる。

日本は日露戦争の最中でありながら、決然と博覧会の準備を遂行し、他国が出品の陳列に手間取るなか、日本からの出品は万博開場前に滞りなく陳列され米国から感謝されている。ロシアは日露戦争が勃発すると参加を取り消したが、結局美術、工芸、心芸工業館に出品が陳列されたが、なかなか陳列すべき品物が米国に到着しなかった。

### 3. 日本政府の展示

#### 1) 日本政府館および日本庭園

セントルイス万博の出品部類目録は15区に大別され、陳列館も12館が建設された。日本は教育、美術、工業、工芸、通運、採掘及冶金、農業、林業漁業及狩猟、電気9館に陳列面積を得た。心芸館では、星一が個人で博覧会会社と交渉して、日米週報社より活字その他日本字新聞に要する機械を出品し、ここで『日米週報』を発行した。<sup>11)</sup> 日本は面積15万平方フィートの政府館の敷地全体を日本庭園と名付けて、掲示を本門及び二か所の側面に建て常時開放し、公衆が自由に観覧できるようにした。敷地内には、御所風の本館、事務所、眺望亭、売店、台湾

喫茶店、金閣寺を模した金閣喫茶店、吉野庵、四阿屋などの建築物と日本庭園を造った。

日本庭園は、池・築山や在来の林丘を利用して小瀑布を造り、園中に石灯笼・青銅の鶴鹿を配し、池中の中島には土橋・舟板橋を架し、日本特有の景趣を再現した。「高い丘の上に建つ日本庭園は独特の珍しい地形で造られ、博覧会で最も絵のように美しい風景の一つである。」<sup>12)</sup>と称賛され、来場者も多く、しばしば外人の園遊会に借りられた。本館は、当初名古屋城を模して建築される予定であったが、工事に日数がかかり、経費の都合もあり古代藤原時代の寝殿造り風家屋になった。本館には古今各時代の服装を来た人形を陳列し、日本の風俗変遷の歴史を展示した。眺望亭は1903年の第五回内閣勲業博覧会に宮内省御料局より出品した建物を博覧会事務局が買い受けて移築したものであった。

台湾喫茶店は台湾総督府が台湾茶の広告のため、日本政府の補助金を得て日本庭園内に建築した。台湾喫茶店は、純粋な台湾風の家屋で、米国人の目には清国の家屋に見えるかもしれないので、正面の上部にFORMOSA すなわち台湾という英文と烏龍茶と筆太で記し、何人も台湾が日本帝国の領地であることを推知できるようにした。この館では、台湾少女2人と台湾男性2人が接客にあっていたが、この4人は実際は帰化清人で日本語を上手に話すことが出来た。二階では米国音楽隊が時々君が代を演奏していた。<sup>13)</sup>

当時の国際社会では、植民地を領有することが一流国の証明であった。そのため、台湾館建設の目的は台湾茶をはじめとする台湾の産物の宣伝というだけでなく、西欧諸国と同様な近代国家、すなわち植民地を持つ国という面をアピールするという目的が如実に現れていた。

## 2) 「アイヌ人」の展示

「はじめに」でも述べたように、セントルイス万博の展示の中でも特に注目されたのが「人間の展示」であった。19世紀から20世紀にかけてはいわゆる帝国主義の時代で、西洋諸国は市場の拡大を競い植民地獲得を積極的に推し進めていた。そのため万国博覧会の展示は、資本主義の展示であると同時に帝国主義の巨大なディスプレイ装置であった。1889年のパリ万博以降、自国の植民地の物品を展示するだけでなく、会場内に「植民地集落」が再現され、連れてこられた人々が「展示」されていた。セントルイス万博では、これまでの万博よりも大規模に社会進化論的な仕方で「原住民の展示」が行われた。

セントルイス万博の人類学部門に、「人間の展示」が組み込まれ、様々な種族のアメリカ・インディアン、アフリカからはピグミー、アルゼンチンからはパタゴニアの原住民、カナダからはクワキトル・インディアンが連れてこられ、模造の集落の中で「生活」させられていた。博覧会の人類学館長は、セントルイス万博の人類学上の展示は蛮族の人類及びその生活状態を実際に観覧させることを重視し、各種の蛮族を網羅することに努めているとし、日本にも「アイヌ人」の展示を求めてきた。「アイヌ人」展示の目的は「日本本来ノ土人（「アイヌ」ヲ云フ日本人ハ外ヨリ移住シ来リタル者ト爲ス）ノ工業上ノ發達ニ比シテ日本人ノ驚クヘキ進歩ヲ示サントスルニ有」<sup>14)</sup>とした。

男性4人、女性3人、子供2人からなる「アイヌ人」は1904（明治37）年3月7日に通訳稲

垣勇太郎とともに札幌を出発し、翌1905（明治38）年1月7日に帰国した。日本出発時の「アイヌ人」一行の姿を、東京朝日新聞は1904（明治37）年3月16日付で次のように伝えている。一行はいずれも日本服を着し妻は毛髪を垂れ口邊には入墨をし、両耳には大きな金輪を掛け又娘は赤前垂を掛け日本語を多少理解していたようだ。また一行の内サンケアは、長男が十年前英国宣教師とともに東京に行った後、音信が途絶えていたため、今回の出京を幸いに長男の所在を調査したが手掛かりなく、夫婦は非常に落胆していた。博覧会社が往復の旅費、生活費、報酬を負担し、帰国した時には、各家族七百円以上の貯金ができたといい。

米国での「アイヌ人」の生活は、「アイヌ人、日本北部の北海道の毛深い人」と称され茅家の前に立つ幼児2人、民族衣装を着た女性2人、男性2人の写真<sup>15)</sup>や1904年9月1日付けの東京朝日新聞の次の記事で知ることができる。博覧会では入場者を増やすためにしばしば祝日を設定していた。8月6日には Manufactures Day と称し工芸工業館で仮舞台を設け、演劇など行っていたが最も来館者の興味を引いたのが未開人の舞踊であった。その中に「アイヌ人」8名もいたが、「アイヌ人」の踊りは手を叩いてハツ、ハツと叫ぶだけで、コンゴ河畔の小黒人よりも劣っていたと言われている。白人は他の踊りには笑わないが「アイヌ人」の踊りを見て腹を抱えて笑い、「貴国の内にも歌を有せざる土人ありや貴国は教育の普及欧米に劣らざることを知る何故此の土人に優美なる歌を習わしめざる」と記者に問う米国人もいた。この記事からは、西欧と同様に自国内に教育すべき劣悪な人種を抱えているという優越感が見いだせる。1904年8月23日の東京朝日新聞の「今回の博覧会場内に人類学上最も有益なる出品は未開人の現状を観覧することであり、北海道のアイヌもその一人である」という記事からも、西欧と同じ視点から「アイヌ人」を見ていたことがわかる。

同様な視点からの描写は、同年10月11日の東京朝日新聞の「比律賓群島の出品」と題した記事にも見られる。今回の博覧会の中で最大面積で比律賓群島大博覧会の観があり、この中のマニラ土人部はただ土人の実状を見るだけで、「奇々怪々なる銅鑼のごときものを叩き数十人円陣を造って踊り回る所あるも見るに堪えず」。日本が西欧の近代化を目標とする以上、日本人より下位に所属する人種集団が必要であった。それがまさに「アイヌ人」であり、台湾であり、日清・日露戦争の戦場となった朝鮮や中国であった。さらにそれを包括的に示し、また日本が近代国家としての体裁を整えてきたことを、視覚的に示そうとしたのが、以下に述べる日本の領土の地理模型であった。

### 3) 帝国日本の誇示

通運館では、大阪会議所の主唱により海陸通運業者合同で、本邦及び近海隣境交通事業の発達を示し、我が国の文化の真相を紹介し、外国人の来遊の念を起こさせることを目的として、展示物をつくった。練紙製大日本帝国、韓国全部及び北清満州一部の地理模型、刺繍大日本帝国世界航路圏額・大日本帝国名勝彩色写真館であり、費用予定額は六万五千元であった。このうち特にアメリカ人の目を引いたのが、練紙製大日本帝国、韓国全部及び北清満州一部の地理模型であった。これは、日本全国、支那の東海岸、韓国全部、満州の一部を示し、ただし満州

の他の部分は博覧会場で増製する予定であった。練紙すなわち半紙を解いて微細の繊維としてこれに布糊を加えて板上で練ったもので地勢を築き、その表面に地図を貼り付けし、正確に縮尺して作成した地理模型は、製作日数150日、製作延べ人数一万人を要した。

この地理模型は「日本の巨大地図」として、米国の新聞に次のように掲載された。<sup>16)</sup> 栗塚氏は米国にこの地図の説明者として派遣され、万博で日本の器用さの実例として、日本と近隣の巨大な地形図を完成することを約束した。地図は日本国土・朝鮮・南満州が描写され、満州は真ん中に描かれていた。栗塚氏は、「私達は満州を見せるために、600ドル使った。今私達はそれを青く塗っていないが、万博が終わる前には、ここのようにすべて青く塗るだろう。」と語り、日本が統治してある所を青くぬって、日本の主要な領土を示した。彼は毎朝仕事を始める前に戦争の記事を読み、戦争の最前線の場所に日本の国旗を描いたので、この地図を見れば誰でも日本の軍隊の正確な進撃を知ることができた。

参観者が「この展示の鉄道は何マイルあるのですか」と問えば、栗塚氏は「全長4260マイルで、1200の建物、1700の機関車が使用中で、そのうち800が米国、45がドイツ、残りがイギリスとフランスの型です。我々の機関車工場は大規模なエンジンの生産を始めている三つの工場(大阪、神戸、東京)がある。」とただちに説明した。彼はいつでもゲーターを持ち歩いているようで、参観者が持っている好奇心以上の知識をつめこみ、この地図で「日本」を完璧に紹介できた。

日本国内でもこの地理模型は注目され、米国での評判を各新聞は、次のように伝えている。「日露戦争の日本勝利の記事によって、金州、旅順口の名を知らないものはいないので、いつも人の山を築き、満州方面に注意するものが多かったので、造図担当者釜瀬某が満州内地を増補しハルビン迄の模型を製造した。装飾、売品でないものに数万円の大金をかける壮挙に嘆賞を禁じず」<sup>17)</sup>「戦勝を以て世界の注視を、招きし我邦の地勢を紹介する尤も興味ある大出品として人口に噴噴たり」<sup>18)</sup> これらの記事から日露戦争の勝利は、日本の国際的地位の向上をもたらしたという揺るぎない自信を、見ることができる。

天皇の代理としてセントルイス万博を訪問した伏見宮貞愛親王も、日露戦争の勝利と西欧化した日本という印象を米国人に与える役割を担った。伏見宮は米国到着から "PRINCE FUSHIMI" として軍服や西洋の礼装をした写真とともにたびたび新聞に大きく掲載され、次のように紹介されていた。伏見王子は日露戦争の激戦の一つであった「南山」の英雄として日本では知られており、代表的な日本軍人で政治家で外交官である。彼は日清戦争の功績により天皇から勲章を授かり、セントルイスに到着した時の歓迎式典でそれを身に着けていた。<sup>19)</sup>

米国に近代国家としてのイメージを植え付けたいとする日本の意図は、万博参加当初から米国に伝わっていた。東京日日新聞は次のような1904年2月25日付の聖ルイス、レパブリック新聞の記事を紹介している。<sup>20)</sup> 日本人はアメリカ人に次のように公言している。「我等は戦争の勝敗に関せず博覧会には素晴らしい出品をしよう」。彼等は全然矛盾するものでなければ一旦約束したことは必ず成遂げる覚悟があり、アメリカ人が日本を愛するにはこの精神にある。しかし、日本人の本心は「彼等日本人は露国が廃棄せる場所を得んことを求め且つ自らの場所殆ど九万

平方尺を充さんと企てつつある事実を以て彼等の方針を明に認むることが出来る。彼等は今日アメリカ人に日本の物品を広告せんと企つると同時に亦黄海の一遍に於て活動極なき一大国が建設せられたことを知らしめんが為めである。」

巨大地図の製作目的は、日本が所有している電話線や電信線、汽船や鉄道のルートや、日本の植民地をアメリカ人に見せることによって、近代日本の進行を示すことにあった。しかし、来訪者は地図から近代化した日本のイメージを読み取るより、長さ100フィート、幅50フィートの地図の大きさと精巧な描写に驚き、山が多い自然に目を奪われ、「どうやって多くの人口が生存できるのか」という疑問を抱いただけであった。

#### 4. 日本の伝統文化としての茶道

日本が積極的に万博に参加した目的には貿易の拡大があった。1858（安政5）年に徳川幕府が米国との間に日米修好通商条約を締結、翌年には、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとの間にも通商条約を締結し、世界に向かって国を開いた時、日本から輸出されたものは、第一に生糸、ついで茶（緑茶）、蚕卵子であった。しかし、世界商品として流通していた茶は、緑茶ではなく日本人の生活にはなじみのなかった紅茶であった<sup>21)</sup>

日本政府は、日本茶の輸出拡大のための宣伝の場として海外の博覧会を利用していったが、欧州では日本茶は受け入れられず、日本茶の唯一の市場となったのが米国であった。製茶輸出のおよそ80%以上が米国に10%前後がカナダに輸出され、20世紀初頭の米国では、ティーといえば緑茶のことで、緑茶に砂糖とミルクを入れて飲んでいた。この飲み方では、紅茶の方が緑茶より適しており、米国で紅茶より緑茶の消費が大であった理由は、緑茶が紅茶よりも先に米国市場に紹介されただけであり、いずれ紅茶の消費が緑茶を上回るであろうと予想されていた。そのため日本政府は、1893（明治26）年のシカゴ万博で初めて日本茶の喫茶店を開くなど、日本式の緑茶の正しい飲み方を広める努力をしてきた。

セントルイス万博の頃は米国において日本茶は中国茶に勝利したが、紅茶の輸入が増加してきていた。日本政府は、セントルイス万博の日本政府館敷地内の金閣寺喫茶店において、砂糖もミルクも入れない日本式の緑茶の飲み方を宣伝した。しかし、米国人の目を引いたのは、日本の緑茶より金閣寺喫茶店で客にお茶を呈したり、踊りを披露した日本女性であり、彼女たちは「ゲイシャ・ガールズ」としてたびたび新聞に着物姿の写真が掲載され、彼女たちの仕事は次のように説明された。いろいろな色の着物を着た「ゲイシャ・ガールズ」は、小刻みに歩き、しとやかに、西洋の人々がめったに経験しない風味で、日本の香り高い土地から運ばれた美味しいお茶を呈した。<sup>22)</sup>

また、日本の精神文化である茶道は、米国人の好奇心を呼び「名高い日本のティ・セレモニー」として、日本作法の権威と紹介された着物姿の安部嬢と助手が、茶室でお客を前にお茶を点てている写真とともに、以下のように新聞に詳細に掲載された。<sup>23)</sup>「漆塗りのテーブルから安部嬢は茶の粉が入っている小さな壺のような入れ物を取る。彼女はへらのような小さな匙で、

茶碗の中に茶を三さじ入れる。彼女は水が沸騰したかどうかを知るために、やかんをじっと見つめ、沸騰した湯を柄杓いっぱい茶碗の中に入れる。お客は茶を待っている間、壁に掛けられた物やチーク材のテーブルの上の小さな家具を称賛したりする。女主人がかき回して泡だてていると、茶碗の中はよい香りですっきりになる。」茶室での会話の内容にも形式があり、客も儀式に参加することに興味をもたれた。

「列の端に座ったお客は他のお客にお茶を呈する義務がある。彼あるいは彼女は立上がり、女主人の優美な手から茶碗を受け取り、茶碗を持つ。この茶碗の持ち方を知ることは茶の儀式に多少は精通していることになる。そして自分と左側の客の間に茶碗を置く。次客は受け取り同じ作法で茶碗を持たなければならない。そして、飲み物は正確に三回半で飲まなければならない。この儀式を行った後、彼女は、着物の胸元から取り出した小さな紙のナプキンで唇が触れた部分をぬぐわなければならないが、もしナプキンを持ってくるのを忘れたのなら、彼女の指で茶碗をきれいにしてもかまわない。お茶を飲む前でも後でもお菓子を一口かじるのはかまわない。お客は一人一人順番にもてなされる。茶碗をきれいにして新たにお茶を点てるのは、その家の主人の義務である。」さらに、米国人に風変わりな習慣と思われたのが、お茶を味わった後も儀式が続くことであった。

「お茶を楽しんだ後、女主人は儀式で使われた様々な道具を洗う。小さな麻の皿洗い用の布を使ってその儀式に使用された茶碗、泡だて器、スプーンを洗い、はでな布のフクサでそれらを磨く。それから、彼女はそれら道具をテーブルの上のいつもの場所にもどす。お客は帰る前に座ったまま深々とおじぎをし、安部嬢も同様におじぎをして、一同歌うようなアクセントで『さようなら』と言う。」茶道で使われた抹茶は米国では知られていなかった。茶道の厳格な形式は、日本の奇妙な習慣として興味を持たれたにすぎず、「お茶を点てる主人はある程度の経験がなければ上手にできないし、この儀式は東洋の国民だけが可能な催し」であり、何よりも日本茶は米国人の好みには合わなかった。「砂糖もクリームも入れないこの高価なお茶を飲むことは、お茶の専門家にとって上品で独特な味であったが、経験のない人々の好みには合わない。しかし、味はよくないが、お客をもてなす作法のレッスン以外の目的がないのなら、茶道として知られるこの複雑な儀式のお客になる価値はある。」

万博での日本政府の日本緑茶普及の努力の結果はどうであったかといえば、明治末年に米国に在留していた農商務省海外実業練習生神谷政司はアメリカ人と日本人の茶に対する態度の差を次のように記している<sup>24)</sup>「日本人ノ飲食物ニ対スルヤ第一ニ形式ヲ貴ヒ其實質ニ至リテハ此ヲ第二トス米人ハ第一ニ実質ヲ貴ヒ形式ヲ第二トス故に前者ハ緑茶ヲ単用シ特種ノ方式ヲ以テ飲用スルニ反シ後者ハ実質主義ニヨリ牛乳及砂糖ヲ混用シテ先ツ其内容ヲ豊富ナラシメ形式ニ至リテハ只之ヲガブ呑スルニ過キス」。砂糖とミルクをたっぷり入れて飲むため、日本茶の持つ香りもデリケートな味も消え失せてしまい、ついに茶なのか牛乳湯なのかわからなくなってしまふ。さらに驚いたことに米国人は茶に対する知識がなく、米国の婦人数十名を招いて日本式の湯式を紹介した時、薄茶は毒物であるかという質問さえ受けたと報告している。

茶を飲む行為の背後にある日本文化の精神性、つまり歴史や文化に基づいた本質的な部分は

米国人には理解されず、そのことが日本人をたえずいらいらさせていた。同様な観点は、セントルイス万博で開催された万国学術会議<sup>25)</sup>での岡倉天心の演説、"Modern Problems in Painting"（「絵画における近代の問題」）にも見られる。「茶の湯は儀式でないからこそ儀式と呼ばれる。客と主人とはいっしょになって部屋の統一と会話のリズムを創りだして行かなければならない。暗示的なものの崇拜は、われわれの芸術意識の不可欠の要素である。」<sup>26)</sup> 岡倉天心はボストン美術館の東洋部顧問として在米中に英文で書き1906（明治39）年に発表した"The Book of Tea"『茶の本』で、日本茶を商品としてではなく、その精神文化としての側面を強調した。「茶は薬用としてはじまり後飲料となる。シナにおいては八世紀に高雅な遊びの一つとして詩歌の域に達した。十五世紀にいたり日本はこれを高めて一種の審美的宗教、すなわち茶道にまで進めた」<sup>27)</sup>さらに「茶の心」とは、日常生活の些細な事柄に美を見出し、それを礼賛することであり、茶は単なる飲料ではなく、文化であることを主張した。しかし、米国人のあいだでは日本の茶は、東洋のエキゾチックな風習にすぎず、1909年をピークに日本緑茶の米国での需要は減少していったのであった。

## 5. 米国の日本の展示に対する評価

### 1) 「Pike」での日本

日本の展示の中で、アメリカ人に最も鮮烈な印象を残したのが「Pike」の日本村であったことから、米国における日本の位置が理解できる。「Pike」は、万博の会場を内外に分ける境界部に細長い区画に、25の人種、6000の演技者、1500の動物など殆どの地球上の異相を集め、カイロの街、インドの帝国、中国の村、日本の縁日の再現や、動物ショー、ボーア戦争のショーなどが繰り広げられた大娯楽街であった。日本村の入場料は25セントで、「Pike」の通りでは一番高価であったが、強国ロシアを撃破している日本に好奇心を抱き多くの人が来場し、ある晩には2500人もの見物人があった。

「Pike」の日本村は、次のように米国の新聞で紹介された。<sup>28)</sup> 日本村は美しい芸術的な作品で、由緒ある寺院の門、日光門でできた非常に高い入り口があり、村中には日本の多彩な着物で盛装した多くの芸者がいる優美な茶室がある。茶室はすみずみまで磨かれ、最も美しく人気のある品物が置かれていた。日光門を入ると東京の典型的な道にはいり、珍しい物や芸術作品、東京の店で見つけることができる小さなものを買うことができる。通りのはずれに劇場があり、劇場の左側に東京の天皇の庭のミニチュアのレプリカがあり、遠方に巨大な日本の神聖な山、富士山が描かれている。

セントルイス万博で、外国の展示の中でも抜きんでて注目を集めたのは、多大な費用で再現されている「日本の風俗」であるという新聞記事が掲載された。<sup>29)</sup> そこでの「日本」の描写は、以下のものであった。日光東照宮の門、仁王門の再現、日本庭園の中の喫茶店では40人の芸者が踊り、三味線をひいている。湖の向こう側の劇場では日本人が長い日本刀や槍、鎧で古来の戦闘を実証している。見慣れない鶴やこうのとりが湖の浅瀬に置いてある。大通りでは10歳と

12歳の日本の機織り少女が敷き物を織る。戸外の高い棒の上で軽業師が演じている。通りの両側には、店の前面に品物を並べた店が並び、一粒の米に像を刻む人、カードや霊媒の代わりに、金属の道具で運命を占う易者、日本人が引く人力車は混雑した大通りをぬってお客を運ぶなど、日本の混沌とした都市生活を再現している。奇妙な言葉のささやき、楽器をならす音とともに日本のこの光景は、博覧会での忘れられない思い出の一つになるだろう。「pike」には、アメリカ人が日本に期待するところにぴったり即したものがあふれていた。日本村からかもし出される雰囲気は、まさに米国人が好むミステリアスアジアであった。

一方、シカゴ市社会党大会に出席するために米国に滞在していた片山潜は、セントルイス万博を訪れて「pike」について次のように批判していた。「日本村はさんざんの有様で過日一同ストライキをし、白人の株主に反抗し以来ゴタゴタが絶えない。昨日も芸者は興業を止めて村内索漠の有様であった。元来日本村は日本人をダシに使って米国資本家が金を儲ける場所にてその有様は驚くべきこと事ばかりだ」<sup>30)</sup>

## 2) 日本の風俗

女性の着物姿だけでなく、人力車の車夫や大工の行動や服装も珍奇なものとして興味を持たれた。人力車はすでに1889年のパリ博覧会に出展され、大変な人気を呼んでいた。セントルイス万博でも150台の人力車が会場内を走り、車夫はお客に快適な時間を過ごしてもらうために手でぎゅっとシャフトを握り、道を開けてもらうためにずっと声をあげていた。彼らはカーキ色のユニフォームを着て、日除け帽子をかぶっていた。人力車を動かしている車夫こそ「真の日本人」だと称賛された<sup>31)</sup> 人力車は1937年のパリ万博にも出展され、日本を代表する乗り物になっていった。

金閣寺を模倣した建物を建築する方法は、大工の服装とともに、アメリカ人の興味を引き、小さな大工が曲芸師のようにすばやく巧みに鉄の釘のかわりに、木のロープを使用していく姿が大きな挿絵となって新聞に掲載されていた<sup>32)</sup> 初めて万博会場を訪れた人は日本館を建設中の大工の行動に非常に興味を示し、日本的な服装の大工の集団に見とれていた。大工たちは、自分達の国の作業服であるピッタリ身に付いた男性用の半ズボンと女性の着物によく似た上着を着て、靴は「親指だけ離れている手袋のようなもの」を履いていた。アメリカ人は外国人は外国人らしく振る舞うことを好み、自分達と異なることに興味を持った。そこには異文化を理解しようとする姿勢はなく、優越意識を持ったまなざしで異国情緒あふれる風景を楽しんでいた。そのようなまなざしを当の日本人はどう受け止めていたのであろうか。

1904年7月3日付の朝日新聞は「日本の風俗」と題して、次のような記事を掲載している。「日本の大工、職工は、工事が完了していないので、毎日印禅天に股引姿で博覧会に入入りし、この姿は見慣れた人も多いが、帰宅後の近傍を散歩する姿は実に恥ずかしい。日本流の浴衣にへこ帯足袋も穿かずに腰に手拭いをはさみ、平然たるところは白人たちの物笑いになっていて、この姿は大工だけでなく、少し地位のある人も暑い日に日本流の姿で大道を横行し注意を受けても平然としている。」8月15日付の朝日は再び、この姿をなげき「米国では劣等人種として

取り扱われる黒人にもこのような姿はあまり見られない。世界的活動を試みようとする日本人は、この点を改良しよう」と記事を結んでいる。

日本は、遅れた国というイメージを無くしたいという思いがあるが、米国は自分達と異なる風俗に反応し、芸者はくりかえし、新聞に写真入りで掲載された。日本村で興行するために米国に渡った日本芸者都踊りの一行は、「ゲイシャ・ガールズ」と呼ばれて、万博の会場に到着した時から、服装や習慣がアメリカ人の眼を引いた。日本政府は櫛引弓人に都踊りの営業を許可するにあたって、第5回内国勸業博覧会余興浪花踊りに出演した者から選ぶこと、渡米後の住居、服装、生活を細かく規制し、日本の恥にならないように注意した。しかし、芸者の踊りは不評であったようで、1904年7月18日の米国の新聞記事として、東京朝日新聞が次のように伝えている。<sup>33)</sup>「劇場の装飾は日本の美術品でりっぱにできているが、芸者は米国の女優としては少しも取り柄のない容体で、釣人形か何かの様で體までが弱々しく、無感動を装う点に於ては甚だ巧妙で、恐らく世界第一である。二十人の日本芸者の容貌や姿勢が皆一定した様に好く似ているのはドーモ不思議である。斬合の場であるが活発な所もなければ、鷹揚な所もなく、単に同じ様なことを繰り返す、日本人風の動作にすぎぬのだ。まさに演技が「日本人風」であったために、都踊りは低く評価されたのである。しかし、女優としては酷評された芸者が、日本村の茶屋での接待については称賛されている。日本茶屋は竹と紙とで出来ていて、内外に多数の提灯を掛け、芸者も給仕女として茶や菓子を出して客を接待していた。「ここへ来た見物人は、亜細亜の夢を見る心地がする。場所といい、給仕といい、三味線の音といい、香の香りといい、一つとして珍しくないものはない。」また、都踊りの営業中止をめぐるトラブルから、芸者16名が日本に帰ることを拒否した事件は、奇異なこととしてアメリカ人の注目を集め、連日のように新聞に取り上げられた。

万博開催前の1904年2月25日付の聖ルイス、レパブリック新聞は日本人について次のように述べていた。「日本は文明を虚飾せる国であると云ふ評は、恐らく或る程度までは事実ではないか。日本は其諸制度に就きて考へて見るも、未だ共和的なりと称することは出来ぬ。国民の或部分は未だ半開の状態であつて、昔の姿より余り変わつては居らないのではないか」<sup>34)</sup>という日本に対する潜在意識があった。このよう意識は万博での日本の展示によって劇的に変化したとは思われない。米国の新聞記事が好んで取り上げた日本は、米国人が抱いていた「日本」のイメージに即した異国情緒あふれた珍奇なものであった。それは、万博で名誉賞を得たのが、機械や電気製品でなく、日本人が予想もしなかった麦わら細工の「茶入れ」のような日本特有の物品であったことが如実に示している。日本は西欧諸国の中にはない珍しさを評価されたのであり、その文化的価値が理解されたわけではなかった。

## 5. おわりに

日本は日清・日露戦争の勝利や国内の近代化により、西欧諸国に連なる国になったことを万博を通して米国に提示しようとした。万博で欧米諸国が自らの植民地の数を誇示していったよ

うに、セントルイス万博の運輸館で展示した日本領土模型地図において日露戦争の勝利に伴い領土を拡大していった。また、欧米人と同様な優越感を伴う好奇心で万博に展示された「アイヌ人」や「フィリピン人」を見ていた。日本の伝統文化の精神的価値をアメリカ人に理解されないもどかしさを感じていたが、日本自らも異文化を多面的に見る視点がなかったとも言える。

19世紀半ばから欧米諸国によって盛んに開催された万博は、非西欧世界を社会進化論的な階段の中に位置づける装置の役割を果たしていた。そのような万博に、アジアの伝統的な国家と欧米と同様な近代国家という二つの日本イメージを提示した時、米国に受容されたのは、従来と変わらないエキゾチックな日本であった。米国が抱いていた近代的西洋、遅れた東洋という世界像と一致するものだけが受容されたのであった。そして、近代化したと自負する日本を米国は西欧を頂点とした枠組みの中に、「東洋の長男」として配列していった。この役割は、日本にとって都合の悪いものではなかった。

日本は、セントルイス万博の前年に第五回内国勧業博覧会で、「学術人類学」と呼ばれる展示館において、すでにアイヌ人、台湾の原住民、インド人などの「異人種の展示」を行っていたのである。日本は帝国意識を強烈に持ち始めた日露戦争以後、万博において植民地的展示を大規模に展開していった。そして、日本が欧米から求められたエキゾチックなイメージをアジア諸国に強要していったのである。

#### 【註】

- 1) 例えば Robert W. Rydell, *All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*, Chicago: University of Chicago Press, 1984, pp.154-183を参照。
- 2) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社、1992年。
- 3) 園田英弘「日本イメージの演出」1985年『図説万国博覧会史』思文閣出版142-153頁。
- 4) 佐野真由子「文化の実像と虚像—万国博覧会にみる日本紹介の歴史—」『国際関係論研究』（国際関係研究会）第9号1995年、77-112頁。
- 5) Neil Harris「世界はるつばか—アメリカの博覧会における日本—1876年から1904年まで」『日本とアメリカ—相手国のイメージ研究—』加藤秀俊・亀井俊介編、日本学術振興会1991年。
- 6) 畑智子「セントルイス万国博覧会にみる「日本」の建築物」『日本建築学会計画系論文集』第532号、2000年6月、231-238頁。
- 7) 農商務省『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第一編および第二編1905年。
- 8) 川口仁志「セントルイス万国博覧会における日本の教育」日本比較教育学会第37回大会2001年6月23日、発表用資料、1-2頁を参照。
- 9) St. Louis Public Library 所蔵、Scrapbook, Vol.12, p.108.
- 10) Ibid., Vol.12, p.110.
- 11) 星新一『明治・父・アメリカ』筑摩書房1975年、pp.214-220。『東京朝日新聞』1904年7月20日に「聖路易博覧会」として掲載。
- 12) Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.115.
- 13) 『東京朝日新聞』1904年7月13日「聖路易博覧会—日本政府館落成式」として掲載。
- 14) 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編 pp.264-270.

- 15) *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.5, No.5, August 1904, p.15.
- 16) Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.123.
- 17) 『東京朝日新聞』1904年7月14日「聖路易博覧会一運輸館」。
- 18) 『新愛知』1904年9月29日「聖路易博覧会報告」。
- 19) Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.135 "PRINCE FUSHIMI KNOWN AS HERO OF NAN-SHAN"
- 20) 『東京日日新聞』1904年3月26日。
- 21) 角山栄『茶の世界史』中央公論社1980年、『茶業ニ関スル調査』農商務省農務局「農務彙纂」23, 1912年を参照。
- 22) Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.123.
- 23) Ibid., Vol.12, p.127.
- 24) 『世界ニ於ケル茶業ノ状況』農商務省商工局編「商務彙纂」17, 1913年。
- 25) 渡辺かよ子「1904年セントルイス万国学術会議に関する考察—学問の専門分化への『教育的』対応の視角から—」『名古屋大学教育学部紀要』（教育学科）第40巻第2号1993年度、他を参照。
- 26) 岡倉天心「絵画における近代の問題」高階秀爾訳1904年『岡倉天心全集第2巻』平凡社1979年、82頁。
- 27) 岡倉天心「茶の本」1906年、『岡倉天心全集第1巻』266頁。
- 28) Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.126.
- 29) Ibid., Vol.12, p.119
- 30) 片山潜『片山潜著作集第2巻』片山潜生誕百年記念会、河出書房新社1960年、181頁。
- 31) *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.5, No.6, July 1904, p.29.
- 32) Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.128.
- 33) 『東京朝日新聞』1904年8月18日、19日。「聖路易博覧会日本藝妓の評判（上、下）」（7月18日米国新聞所蔵）として掲載。
- 34) 『東京朝日新聞』1904年3月26日。